

聖アンデレ教会の皆様

主にあって平和をお祈りいたします

「命をまもるため」また東京にあって「教会の社会的な責任」を考えて、公禱（広報され公開された礼拝）を休止する、という苦渋の決断。前代未聞の事態に困惑しながらこの週を過ごしました。

新型コロナウイルス感染対応の事態の終息と、日常の生活の回復、また公禱が再開し、みなさまとお会いし、共に集い祈りをささげられる時が一日も早く訪れますよう、祈念しています。

祈りによって神さまとその民に結ばれ、祈り祈られまた分かちあうことの喜びを知る、主にある共同体の一人ひとりとして、どんな時も祈ることを忘れないようにしてゆきたいと願っています。それぞれの場での礼拝と祈りが日々重ねられ、祈りあう交わりの中にある教会の働きが祝福されてゆきます。困難な状況にある時だからこそ、ぜひこの祈りの輪にお加わりください。わたしたちのそれぞれの祈りは、わたしたちを結びあわせ、この豊かな祈りは教会の祈りとして、神さまのみ前にささげられます。神さまはわたしたちの祈りに耳を傾けてくださいます。

わたしたちの家族、聖アンデレ教会に連なる人びと、地域・東京に暮らす人びと、また教区、管区、世界の教会の働きを覚えて祈ります。そしてさまざま困難や悲しみの中にある人びとを覚えて祈ります。また感染症に伴う困難が過ぎ去り、悲しみが癒されますよう祈っています。

こうした祈りと思い巡らしを通して、わたしたちは神さまの愛のうちにおいて、ともに命を守り合うこと、思いやり支え合うことをさらに知り、そして信仰生活とその態度、またわたしたちが生きる社会に対するキリスト者としての洞察を深めることにつながるに違いないと確信しています。

大斎節第3主日（3月15日）の使徒書に、「そればかりではなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」（ローマの信徒への手紙5:3～）という聖パウロの言葉が選ばれています。そして、わたしたちキリスト者の希望とは「すでに始められ、キリストの再臨によって完成される神の国です。神はこれを全人類のため備えておられます。」（教会問答34問）と教えられています。

「み国が来ますように」と祈る主の祈りの心こそがわたしたちの希望の源泉だと言ってもよいでしょう。そしてこの希望は確かなものです。

主イエスさまの「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイによる福音書28:20)とのお約束を忘れることなく、ともに歩んでくださる主に信頼して、祈りつつこの時を過ごしてゆきましょう。

わたしたちの心と体、生活と社会、そして信仰と教会が、神さまの祝福のうちに守られ育まれてゆきますよう祈ります。

「全能の神よ、どうかあなたを呼び求めるしもべらの願いをみ心にとどめ、力あるみ手をさしのべてすべての敵を防いでください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン」

2020年3月15日
司祭フランシス下条裕章

。